

子規の俳句研究 その2

俳句に熱中した子規

いつごろから俳句を作っていたの？

子規が俳句に興味を持ったのは、18才のころからです。たまたま借りた俳句の本を読んで、そのおもしろさを知り、自分でも作るようになったのです。

最初はなんとなく興味をもって俳句を作っていたのですが、だんだんと熱中するようになりました。

子規はすごく
研究熱心
だったんだね。



古い俳句(俳諧)を学ぶ

また、俳句を作るだけではなく、松尾芭蕉など昔の人たちが作った俳句の分類にも力を入れました。俳句を、季語(四季それぞれの季節感を表す言葉)や俳人(俳句を作る人)ごとに分ける作業です。

何千・何万という気が遠くなるような量の俳句を、子規は一つひとつ手作業で整理していきました。作業の大変さよりも、こつこつと積み上げていく楽しさの方が大きかったのかもしれない。

こうして子規は、たくさんの俳句を研究したり、実際に自分で作ったりすることで、俳句についての自分の考えをまとめていきました。

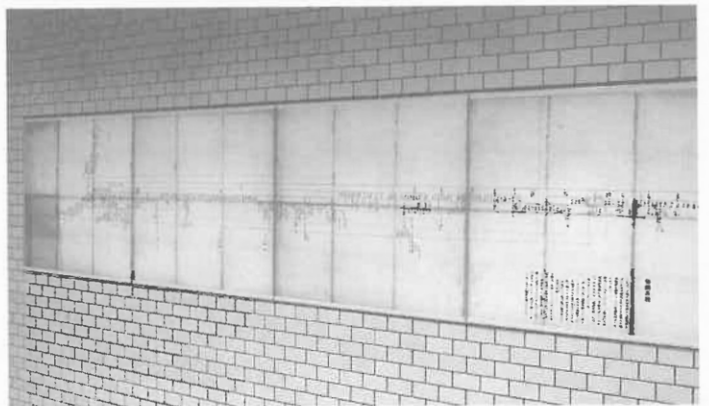
雪降りや棟の白猫声ばかり

子規が18才の時に作った俳句



▲これは、子規が研究・分類した俳句原稿の写真です。2段重ねにした本箱よりも高く積み上げています。すごい量ですね。

展示室で
チェック!

はいかいけいとう
俳諧系統

子規が25才のころ、鎌倉時代から江戸時代に俳諧(古い俳句)を作った人たちの師弟(先生と教え子)の関係を調べて、そのつながりを図にしたものです。紙を22枚使って作りしました。縦約80センチ、横約330センチもある力作です。ほぼ実物大のパネルです。芭蕉はどこにいるでしょう？

小説家をめざした ことも...

子規は俳句のほかに、小説にも魅力を感じていました。そして25才の時「月の都」という小説を書き上げ、そのころ活躍していた幸田露伴という小説家に読んでもらいました。しかし露伴の感想はあまり良くなく、子規は小説家になることをあきらめました。



子規が書いた小説「月の都」



▲小説「月の都」(天理大学附属天理図書館蔵)

旅に出る子規

子規は旅が好きでした。旅に出た時は、歩いたり、人力車に乗ったり、汽車を利用したりしました。松山へ帰る時や、東京にもどる時には、京都や奈良、岡山などあちこちに立ち寄りしました。

そして、旅先で見たことや聞いたこと、感じたことなどをまとめた紀行文を書きました。学生のころからこれらの紀行文を「日本」という新聞に出していました。

26才の時、子規は東北地方へ旅に出ました。江戸時代の俳人・松尾芭蕉が東北を旅して記した「奥の細道」に影響を受けたのです。

子規は、この旅で見たことや考えたこと、作った俳句などを、「はて知らずの記」という紀行文にまとめました。

展示室で チェック! 子規が旅した道

